不定期刊行　　第464号　2012.10.05

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

池工山岳部 OB 交流有明山登山　その2

○第４回有明山登山道の刈払い　昭和６３年９月１０日(土)～１１日(日)

参加人数はＯＢも含めて１３名で行う。用意した道具は、エンジン付草刈機２台・鎌１０丁・ナタ・鋸・ガソリン１０リットルである。松川村よりいただいた草刈機も初めて持参する。学校で作成した「有明山登山道」と彫った矢印の道標を、登山道入口が解かり難いため間違えた人がいると聞いた２箇所に設置する。また、５０ｍのビニール紐を５～６人で持ち距離を実際に測定する。目印にと２００ｍごとに赤布を付けたポールを立て、１㎞ごとにポール２本を立てる作業をする。２７００ｍ測定した地点で１日目を終えた。２日目は、前夜からの雨が激しく、芦間川の増水の瀬音で目を醒まされる。少しでも頂上に近づきたいという山岳部員の意見に、停滞して様子を見るが増水がひどくなる。橋の無い登山道を１０回前後も渡渉して下山しなければならず、課題を来年に残し下山する。

○第５回有明山登山道の刈払い　平成元年９月９日(土)～１０日(日)

参加人数はＯＢ２名を加えて１３名で行う。前年同様の刈払い用具を持参する。その他に道標２枚・５０㎜×１７００㎜角材２本・スプレー塗料(赤と黒)・池工山岳部と書いた赤布を多く用意する。

池工山岳部で用意した道標を設置。１本目は、林道終点付近で旧道が崖崩れで使用できないため新しい登山道となった入口付近、２本目は、取付点と呼ばれる林道終点より、３．１㎞上部に設置する。また、道に迷うことなく安心して登山できるよう赤布とスプレーで目印をより多くつける。

今回の登山の一番の目的は、昨年やり残した距離測定である。役割分担は、５０ｍのビニール紐で距離測定をする班と、ポールを打ち込む班と、エンジン付草刈機を中心にした鎌での刈払い班である。測定は昨年同様に５０ｍ紐を数人で持ち、昨年測定した２７００ｍ地点の目印ポールより開始し、漸く２年がかりの測定を山頂まで完了する。林道終点より有明山頂まで５．２㎞、そして、中岳山頂まで５．５㎞であった。ここまで、２００ｍ毎に１本・１㎞毎に２本ポールを立ててようやくにして、ビニール紐での測定を終了した。

○第６回有明山登山道刈払い　平成２年９月８日(土)～９月９日(日)

松川村観光協会より資金助成を受け、また武田武長野県山岳協会元会長からも、アドバイスをいただき、道標設置のための許可を大町営林署からいただく。道標作りのための会合や交渉は１０数回にも及んだ。

実際に登山する場合は馬羅尾キャンプ場からになるため、キャンプ場から林道終点までの距離を測定する。そして特徴のある名称を付け易い地点６箇所を選定し、６本の道標を作成する。道標は縦３０㎝・横４５㎝のこげ茶色の地に、現在地の地名と馬羅尾キャンプ場からの距離と有明山山頂までの距離と、標高を記入したプラスチックの板である。また、道標には営林署名しか記入許可がおりないので、５０×１５０㎜のアクリル板に、

学校にある数値制御工作機械(MC)で「池工山岳部」と彫り込み、道標板の下にネジ止め出来るよう準備する。

いよいよ当日ＯＢ６名と信毎の森山記者を含め１５名(翌日参加１名を含む)で行う。刈払い用具は昨年同様であるが、その他に道標６枚・５０㎜角×１７００㎜の鉄のパイプ６本・十字に固定用の直径１０㎜×１２００㎜の鉄棒１２本・他にネジやドライバーである。大きなザックを背中に、両手に荷物の大移動であった。１日目に２本設置し、翌日に残り４本の道標を逐次設置して最後は有明山頂にて終了する。また、刈払いは取付点から上部の落合までの１．２Kmの間の熊笹の繁茂している箇所を重点的に行う。

○第７回有明山登山道刈払い　　平成３年９月７日(土)～９月８日(日)

参加人数はＯＢ５名を加えて１４名で行う。最後の仕上げとして、ゴミ回収作業と道案内用赤布の設置を目的とする。そのために鉄製の空き缶潰し機を学校で製作し、重い思いをしながら有明山山頂まで持ち上げる。そして、缶を潰したり、岩の間に捨てられたビン類や缶・ゴミを拾うなど清掃登山を実施する。ゴミは何年もの間積み重なっており腐り始めた物、異臭を放つ物もあり大変な作業となった。ゴミ袋に詰め込みそれぞれのザックへ。部員一人ひとりの、ほぼ空に近かったザックが見事に大きく脹らみ、入り切らない物は袋をザックの上に固定し下山する。登山道整備の最後の仕上げとして、やり遂げた充実感を胸に無事下山する。

以上にて有明山の登山道復活整備事業を終了とした。

振り返ってみると、池工山岳部として初めて有明山登山をした時からの話である。入山したけれど熊笹等で廃道になってしまい登山道がわからず、有明山を良く知っている人でさえ登頂を断念して帰った話から、現在では登山者が増え、松川村でも力を入れて道標の設置や手入れをするようになり、村民登山として広く呼びかけ、毎年参加者が１００人を越えるまでになった。そして、個人的な登山者も増えている様子に、とても感慨深いものがある。

道標や赤布やペンキ等で登山道がしっかりしてきたために、道に迷ったと言う話はこのところほとんど聞かなくなったことは、それなりに価値があり山を愛する一人としてとても嬉しく思う。また激励の手紙や新聞等の報道も池工山岳部員一同の励みにもなった。一人ひとりの力は小さいけれども、目的を持って力を合わせれば、またその力を継続すれば、とても大きな仕事ができることを教えられた。

有明山に登られる皆さんにお願いですが、有明山は山小屋もなくゴミを片づける人もいない特殊な山である。登るときは鎌を持参して１本でも良いから熊笹をたたきながら登ってみませんか。後から来る登山者のために、また来年も登るために是非実行して欲しい。また、人が見ていないからといってゴミを捨てないで欲しい。快適な登山気分を味わうために、苦労して登った山の山頂をゴミの山に替えないために。一人ひとりが自分にできることをほんの少しだけ実行すれば良いのだから。素晴らしい有明山を、素晴らしいままで大切に残したいと思う。これはＯＢも含めた池工山岳部一同の切なる願いである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

せっかくなので、知っておいて欲しいと思って引用した前置きが長くなりました。実際のＯＢ交流会と交流登山の内容については、次号でご報告といたします。